

●モノグラフ小学生ナウ



自然体験

vol.3-4



©1983(株)福武書店 教育研究所/加藤智博・賀川雅子・田中美幸
東京学芸大学助教授 深谷和子・新宿区立落合第五小学校教諭 田中純江

目次

| | |
|--------------------|----|
| 特集／子どもの自然体験 | 2 |
| 調査レポート／自然体験 | |
| 要約 | 6 |
| 1. 子どもたちの自然体験 | 8 |
| ● サンプルの概要 | 8 |
| ● 海や山へ出かけた経験 | 10 |
| ● 自然体験の内容 | 13 |
| 2. 田舎を求めて | 18 |
| ● 両親の育った場所 | 18 |
| ● 祖父母の住んでいる所 | 20 |
| ● 田舎の親せき | 22 |
| 3. 子どもが求める生活環境 | 24 |
| ● どんな地域に住みたいか | 24 |
| ● 自分の町にほしい環境 | 26 |
| まとめに代えて | 30 |
| シリーズ／子ども考現学 | |
| 子どもの姿・昔と今(14) 学校給食 | 31 |
| 資料1・調査票見本 | 36 |
| 資料2・学年・性別集計表 | 43 |

特集

子どもの自然体験

東京学芸大学助教授 深谷和子



パリの子どもたち

3年ほど前の3月にふと思いついて、パリの小学生の生活を見ようと飛行機に乗った。

当時私たちは、子どもの遊びや余暇のパターンに関心を持っていて、国際比較調査を手がけようとしていた。世界各国で子どもたちがどう遊んでいるか、それを通して日本の子どもたちの遊びと生活を見直したいと思っていた。パリへは夫の方が前に一度行ったことがあったが、2、3日の短い滞在だったので、子どもたちの生活ぶりまでを見てくるこ

とはできなかったと言う。その折の印象は、パリの町はどこへ行っても石畳で舗装されており、到底子どもの遊びには向かない町だということだったようである。公園といってもすべての子どもが遊ぶほどの数はないし、いったい石畳の町のどこでどのように子どもたちが遊んでいるのか、不思議に思っただけで帰って来たのだと言う。

さて、念願のパリへ行って私たちが気づいたのは、当然と言えば当然なのだが、フランスという国は農業国で、ほとんどの生活必需品を自給自足しており、パリはその農業国フランスの中にある都市だ、ということである。

つまりバリの郊外には、広大な自然、農地や森林などの自然が広がっているのである。

あまり知られていないことだが、フランスの小学校は水曜日が休みである。フランス人に言わせると、3日も続けて学校へ行かせるのは子どもの体に悪いのだそうである。月、火と2日出て休み、木、金と出て土曜日は半日。なんと楽なスケジュールだろう。長期のバカンスも含めてその休みの日々に、田舎の親せきやセカンドハウス、別荘に出かけて、思いきり遊んで来ることができるので、バリでは別に遊び場がなくてもかまわないとのこと。もっとも学校は9時に始まって昼12時から1時半まで昼休み。その後は4時半まで。日本の学校よりずっと下校時間が遅いし、宿題が山のように出るので、帰宅後ほとんど遊ぶひまもなく家にいることになる。それでも水曜日などに遊びたい時は、お互いの家を訪問し合うらしい。ただし電話でちゃんとお互いどうしの親の許可をとり合って、それから後に相手の家へ出かけるのである。

しかし通常の生活の中で郊外に出かけるのは、時間が限られてしまうので、あまりできないことらしい。そのかわりフランスの夏休みは長い。6月から8月まで、たっぷり3か月はある。その休みが自然のふところでは生活するビッグな機会である。日本のように宿題があるわけではなく、塾に行くわけでもない。

3か月フルに使えるこのバカンスを彼らはどう過ごすか。両親といっしょにバカンスに出かける子どももいるが、多くの子どもたちは、コロニーとよばれる1か月ぐらいの長期の宿泊施設に、親の許を離れて出かけて行く。ツーリストの企画したプログラムもあれば、市が企画したプログラムもたくさんあって、選ぶのは自由であるし、まあまあ安いので、どの親も参加させることができる。行く先も、フランス国内だけでなく、イギリス・スペイン・ギリシャなど、遠くまで出かけて行く。臨海学校、林間学校などのような一般的なもの

のから、テニス、乗馬、ヨットなど、盛りだくさんのプログラムがあって、子どもは自由にそれを選ぶ。私たちがいる町の公園を通りかかった時、サッカーをやっている少年たちがいたので尋ねたら、やはりこれもコロニーの1つのプログラムだという答えが返ってきた。

こうしたバカンスの過ごし方の中で子どもはスポーツをし、自然体験をし、集団生活を学び、親からの自立を学んでいく。なんと恵まれた子どもたちだろう。フランスの学校の教育やしつけは、ある意味で日本よりずっと厳しく、ストレスの多いものと言われるが、こうしたバカンスや休日の利用の仕方では、子どもたちはストレスから解放され、心身ともにのびやかに育つのだろう。

自然体験の必要性

バリの子どもたちがしているような自然体験がなぜ子どもたちの暮らしに必要なか。その意義について考えてみるのが大切だろう。自然体験は、子どもの成長にどのような意味をもたらすのだろうか。



その意味を探るに当たっては自然体験を2つに分けて考えてみる必要がある。

①自然相手の遊びやスポーツ

虫捕り、花つみ、魚捕りに始まって、山での探険や川遊び、潮干狩りや海水浴、ハイキングや登山、オリエンテーリング、スキー、ボート、フィッシング、などの、自然とかかわり合いながらの遊びやスポーツである。動植物を育てたり世話することもこれらに含まれよう。

これらは子どもを日常のあらゆるストレスから解放し、情緒的安定化を生み出す。生きものへの愛情、自然への愛情——つまり自分たちをとりまく環境への愛情を育てる。生きものや自然とのかかわり方を教える、能動的な遊びを体験させ、創意工夫の力を育てる、などの諸側面で、大きな意味を持っていると思われる。

②自然の中での生活

キャンプ、林間学校、臨海学校、子ども村での生活、各種のスポーツ合宿、などがこれに含まれよう。

これらは、高度に発達した文明の中に生ま

れ育ち、限られた意味での環境適応力しか身につけていない現代の子どもたちに、シビアでシンプルな生活を体験させ、そうした環境下での耐性、すなわち幅広い適応力を育て、単純な生活の中から創意工夫の力を発達させ、集団生活を通して社会性を養う、など多面的な生活能力、流行の言葉を使うなら、広義のサバイバル・アビリティを身につけさせることに役立つだろう。その中にはむろん、心身の健康も含まれよう。

欠けている自然体験

さて最近の日本の子どもたちの生活に目をやると大きく欠けているのが、アウトドア・ライフと呼ばれているような、戸外での活動であることは言うまでもない。第一には都市化に伴う子どもの遊び環境、地域環境の悪化があり、第二はそれに反比例するような、インドア・ライフの充実がある。冬暖かく夏涼しい室内、おいしい食事やおやつ、テレビを代表とする各種の楽しみのための道具、おもちゃ、学用品、そして優しく友だちのような



両親、家事や家業の手伝いから解放されたことによる子どもの自由時間の増大。どこをとって見ても、子どもたちが快適なインドアの生活に吸いよせられる条件がそろっている。

しかし他方、こうした見かけの快適さを持ったインドアの生活は、おとなの場合とはともかくも、子どもたちの場合は、その心身発達を少しずつ弱りあるものにさせていっていることに、気づかれています。

つい最近あるボーイスカウトの団長さんから次のようなエピソードを聞いた。最近の子どもたちは、〇〇ジャンボリーのようなボーイスカウトのキャンプに参加すると、決まって何人か体の調子を崩す者が出てくるのだそうである。その多くは便秘が原因らしいと団長さんは言われる。生まれた時から、ウェスタンスタイルの（腰かけ式の）水洗トイレで快適に排泄していた子どもたちは、野外演習で、野原の物陰で排泄しなければならない状況の下では、便が出ないのだそうである。むしろ汲み取り式のトイレも使えない。

このエピソードが物語るように、自然とあまりかけ離れた文明化した生活を送っていると、よりシビアな環境の下では、生活していけないような適応力の幅の狭い人間ができあがってしまう。日本を一步離れば、世界には日本と異なった生活習慣を持った国々が数多くあり、また開発途上国へ行けば、シビアな生活条件の下で暮らしている人びとが、今なお山のようにいるのである。特にこれからおとなになり、世界の国々に出かけて行ってインターナショナルに活躍しなければならない世代の子どもたちは、何より柔軟な適応力の持ち主でなければならないだろう。

また目を日本での生活に向けても、クーラーがあり車があり、暖かい衣服やおいしい食物があり、という生活は、必ずしも私たちの明日に約束されたものとは言えないのである。若い時にあらゆるシビアでハードな体験をし、それによってあらゆる生活や生存への自信を深めさせることが何より必要と思われる。そうしてその機会を提供するいちばんよい手段



が、自然体験であり、アウトドア・ライフの充実なのではなからうか。

そのためには学校でこうしたアウトドア・ライフの機会をもっと積極的に教育のプログラムにとり入れることも必要だろうが（移動教室や遠足などがその一つである）、やはり鍵を握るのは親であり、社会教育のプログラムなのではないかと思われる。バリの子どもたちの例のように、すべての都市の子どもたちが、そうした機会を利用できるような計画が数多く作られることと同時に、特に親たちも、夏休みや春休みの過ごし方を、これまでのように、ともすれば学校のある時の延長線ととらえようとするような態度を、改めなければならないだろう。

調査レポート／自然体験

東京学芸大学助教授

深谷和子

新宿区立落合第五小学校教諭

田中純江

要約

① 海での体験

潮干狩りを1度もしたことのない子どもは、18%、日焼けして背中がむけたことのない子どもが25%、海で溺れそうになったことがない子どもが57%。川や山での体験よりは、やや多いものの、周囲を海に囲まれているわが国の子どもの体験が貧弱と言えそうである。(図4)



② 川での体験



魚釣りや網で魚をすくったことが、生まれてから1度もない子どもは23%、川で泳いだことのない子どもが28%、川で小舟に乗ったことがない子どもが65%と、川遊びの体験はかなり少ない。(図5)

③ 山での体験

歩いて山頂まで登ったことのない子どもは、23%、湧き水や溪流の水を飲んだことのない子どもが39%、山で道に迷ったことのない子どもは89%にも達する。(図6)



④ 田舎にいる祖父母

子どもたちの祖父母（父方母方ともそれぞれ）の半分近くは田舎に住んでいて、夏休みにはやはり半分ぐらいの子どもが、毎年必ずそこへ出かけている。（図10・図11・図12）



⑤ 子どもの生活圏にあるもの



子どもが歩いて行けるか自転車で行ける範囲を子どもの生活圏とすると、9割以上の子どもの生活圏に整備されているのは、公園、グラウンド、デパートである。（図18）

⑥ 自分の町にほしいもの

自分の町に最もほしがられているのは、1)仲よしの友人の家、2)野原、3)林や小さい丘、4)駄菓子屋さん、で、逆に最も望まれていないのは、1)校長先生の家、2)プール、3)受け持ちの先生の家である。（図19）



サンプル数 (人)

| 学年/性 | 男子 | 女子 | 計 |
|------|-----|-----|-----|
| 4年 | 167 | 155 | 322 |
| 5年 | 219 | 148 | 367 |
| 6年 | 150 | 140 | 290 |
| 計 | 536 | 443 | 979 |

調査概要

対象●東京と千葉の小学4・5・6年生計979名
 時期●昭和58年2月
 方法●学校通しによる質問紙調査

1. 子どもたちの自然体験



子どもの心身発達が十分に行われるために、自然の中での遊びや生活体験が、何より必要なことは、誰もが知っている。しかし都市化が進む一方の今日では、子どもの生活環境は日々自然から遠く離れたものになっていく。このままでは果たして子どもたちの健やかな成長が保障されるのだろうか、という危惧の念を、多くのおとなたちが持つのではなかろうか。今日、一体子どもの生活の中で、どの程度このような自然とのかかわりが持たれているのだろうか。

サンプルの概要

子どもと自然とのかかわりをテーマにした本調査では、地域性を考慮してサンプルを選択した。対象となったのは

①海に近い地域 A校(338名)

千葉県東金市の町はずれにあり、海から12キロ、自転車で40分で、海水浴でにぎわう外房の海岸へ達する。昔は半農半漁の町だったらしいが、現在では農家はわずか1割。8

割方がサラリーマンとなっている。子どもの歩いて行ける距離に100mほどの高さの小さい山があり、自然には恵まれた地域である。

②川に近い地域 B校・C校(387名)

東京都青梅市にあるこの2つの学校は、いずれも多摩川の近くにある新興住宅地である。かつて開墾地で畑作の村だったこれらの地域

は、今でも多少の農地は残すものの、ほとんどが都心へ通うサラリーマンのベッドタウンと化している。しかし多摩川の向こうには奥多摩につらなる山々の入口とでもいべき山があり、子どもたちが虫捕りに出かけたリ川遊びをしたりする機会は、他よりも多く残されている。

③都心のD校 (591名)

新宿区にあるこの学校は、典型的な大都市の大規模校である。国電山手線新大久保の駅から歩いて5分ぐらい。1.5キロぐらいの所にコンクリートで土手を舗装された神田川のある住宅密集地で、校区には公務員宿舎などの集合住宅が立ち並んでいる。子どもの遊び場はほとんど校区内に見当たらず、校庭開放をしている。しかし校庭は狭く、休み時間も

二交代制とのこと。

これらの町について、子どもたちがとらえている町の状況は、表1に掲げたとおりであり、また表2には、それぞれの町から、子どもの利用できる自然や遊び場への距離のうち「徒歩、または自転車で行ける」と答えた子どもの割合を示した。海、山、川とあらゆる自然に恵まれているA校、川に近く、山にも恵まれたB・C校と比べて、自然に遠いD校の姿が浮かびあがる。しかしどの地域にも、公園やグラウンドが近くにあり、またアパートも設置されている。ある意味では、都市化がこうした自然に恵まれた地域にまで進行してきていることを示すものだろう。

こうしたそれぞれの地域を子どもたちが、マイタウンとして愛しているかどうかを尋ね

表1・あなたの町は

(%)

| 地域 | A(東金) | B(青梅) | C(青梅) | D(新宿) |
|-------------|-------|-------|-------|-------|
| 自然や遊び場が多い | 28.4 | 21.7 | 30.5 | 4.7 |
| 公園やグラウンドが多い | 44.2 | 58.3 | 44.1 | 36.3 |
| 家や車が多い | 10.7 | 1.7 | 8.2 | 53.1 |
| 山や川、海がわからない | 16.7 | 18.3 | 17.2 | 5.9 |

表2・住んでいる場所の近くにあるか

(%)

| 学校別 | A校 | B校 | C校 | D校 |
|-------|------|-------|------|------|
| 海 | 36.4 | 2.5 | 4.2 | — |
| 山 | 61.2 | 36.4 | 28.7 | 10.5 |
| 川 | 66.2 | 100.0 | 95.9 | 33.2 |
| 湖 | 67.4 | 7.8 | 16.6 | 10.6 |
| 公園 | 95.0 | 99.1 | 98.9 | 99.1 |
| グラウンド | 86.1 | 99.2 | 94.0 | 87.2 |
| 遊園地 | 6.0 | 4.3 | 5.6 | 21.1 |
| デパート | 57.0 | 89.8 | 84.3 | 92.1 |

注) 徒歩、または自転車で行ける割合

たのが表3である。D校に3割、A校に2割ほど自分の町が「嫌い」という答えがあるが、全体としては、自分の住む場所を「好き」と答

える子どもたちが圧倒的であることに、何かほっとさせられるものがある。

表3・あなたの町が好きか

(%)

| 学校別 尺度 | A 校 | B 校 | C 校 | D 校 |
|-----------|------|------|------|------|
| とても嫌い | 4.4 | — | 2.6 | 8.0 |
| わりと嫌い | 5.0 | 1.7 | 2.2 | 7.5 |
| 少し嫌い | 10.2 | 8.5 | 9.0 | 15.1 |
| 少し好き | 13.7 | 11.1 | 14.9 | 21.2 |
| わりと好き | 36.7 | 46.2 | 41.8 | 26.8 |
| とても好き | 30.0 | 32.5 | 29.5 | 21.4 |
| | 19.6 | 10.2 | 13.8 | 30.6 |
| | 80.4 | 89.8 | 86.2 | 69.4 |

海や山へ出かけた経験

人が海を好むか山を好むかは、どこからくるのだろうか。海の大きさとおだやかさは母に例えられ、山の厳しさは父にも例えられるが、子どもたちは一体どちらを好んでいるのだろうか。

まず図1は、海と山とでどちらが好きかを尋ねて見たものである。図が示すように、山よりも海の方に人気がある。しかも男子と女子とを比較すると、特に山は女子からは好かれていない。

さてそうした海や山に、これまで子どもたちが行った経験はどのくらいか。川や湖や沼も加えて尋ねて見た(図2)。

湖や沼を除いては、海、山、川ともそれぞれ4~5回以上行ったことのある子どもはほぼ8割で、けっこうその機会の多いことに気づく。「数えきれないほどたくさん」と答えた子どもも3割前後。男子と女子では、男子の方にやや体験が多い。

しかしこうした体験の量は、地理的条件に大きく左右されることも考えられるので、これを学校別に見ることにしよう。

表4は地域別に「数えきれないほどある」子どもの割合を示したものである。千葉の外房にあるA校では、海へ数えきれないほど行ったことのある子どもが68%とさすがに多く、多摩川の近くのB校とC校は、やはり川に行った経験のある子どもが63%・68%と多い。

しかし、大都市のと真中で、海にも山にも川にも全く無縁の新宿区のD校の子どもたちも、他に比べれば回数が少ないものの、けっこう何かの折に、自然とのふれ合いの機会を持っている様子である。特に海へ行った回数は、青梅のB・C校より多く、山へ行った回数も、わずかだがA校よりは多い。親や学校の教育的配慮が、大都市の自然から遠く離れた子どもたちの上に加えられている様子がわかる。学校での遠足や移動教室、家族でのレジャーが、子どもたちにそうした自然体験を与えているのであろう。ちなみにD校の内訳を表5に示した。都心にあっても4~5回以上海に行っている子どもが8割強、山や川が7割弱と、なかなかの回数である。しかし他方で、ほとんど行ったことがない(1回以下)

図1・海と山とでどちらが好きか

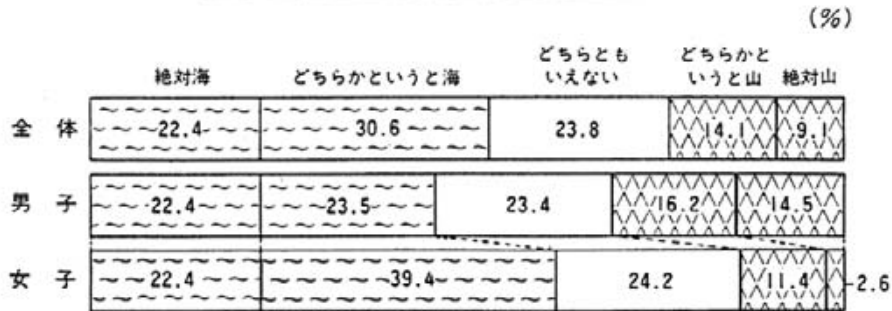
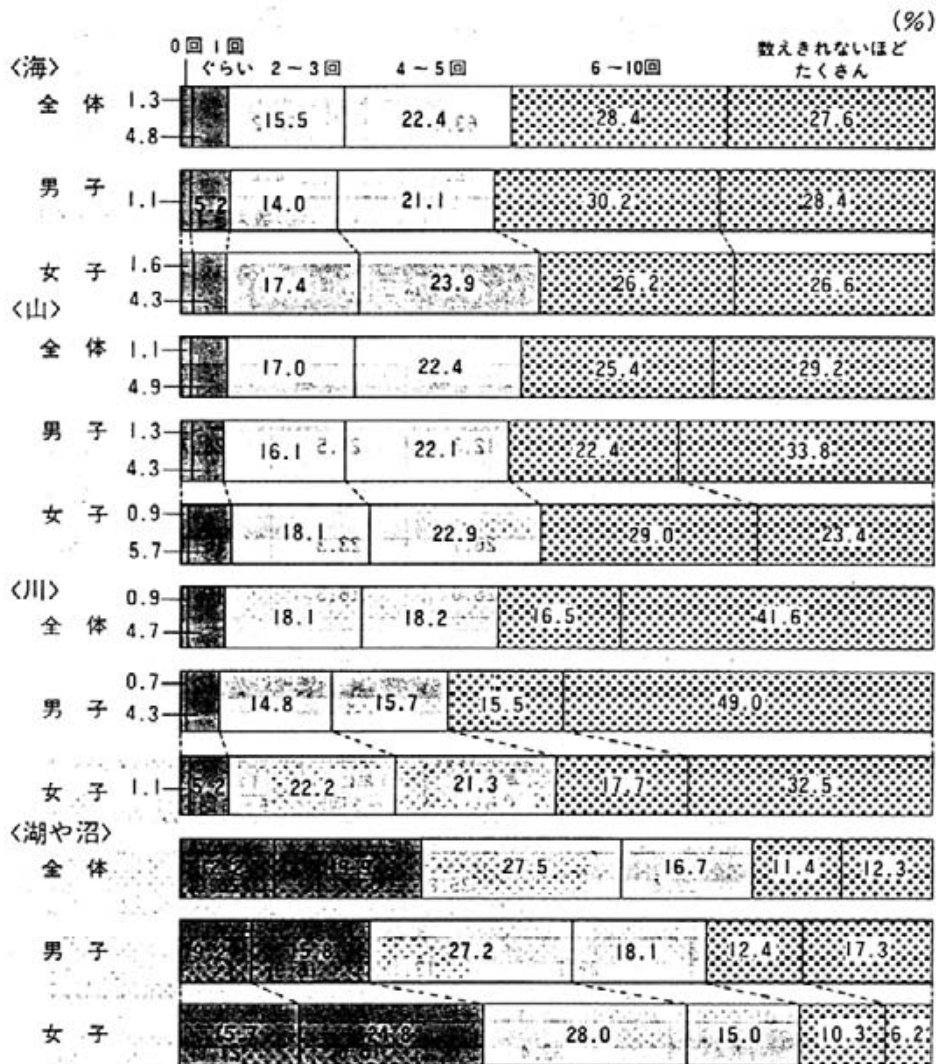


図2・海や山に行った経験



子どもが、山、川ともに1割弱もいて、その分散は大きい。親たちが積極的にこうした機会を用意してやるかどうか、自力では自然に親しめない大都市環境に住む子どもたちの場合の、自然体験の量を決めるのであろう。

これと関連して図3を見よう。家族でのレジャーの回数を尋ねたものである。たいてい

の家が1年に1度ぐらいは山や海や川に出かけているが、これでは不足した自然体験を補うにはあまりに少ないというべきだろう。しかし年に2～3回以上となると、出かける家はぐっと減って、海が36%、川が43%、山が34%となってしまう。

表4・海や山へ行った回数×地域

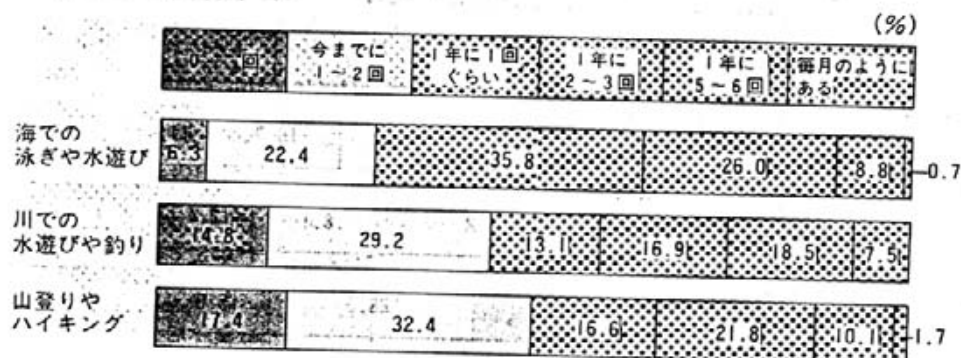
| 項目 | 地域 | (%) | | | |
|-----|----|-------|-------|-------|-------|
| | | A(東金) | B(青梅) | C(青梅) | D(新宿) |
| 海 | | 67.7 | 20.3 | 17.3 | 33.6 |
| 山 | | 22.0 | 31.6 | 35.2 | 25.8 |
| 川 | | 29.5 | 63.2 | 68.2 | 25.2 |
| 湖や沼 | | 31.2 | 12.0 | 12.2 | 13.1 |

注)数えきれないほどある割合

表5・海や山へ行った回数(D校)

| 項目 | 尺度 | (%) | | | | | |
|-----|----|------|-----------|------|------|-------|------------------|
| | | 0回 | 1回 ぐらい | 2～3回 | 4～5回 | 6～10回 | 数えきれない ほどたくさん |
| 海 | | 0.3 | 3.0 | 12.8 | 21.5 | 28.7 | 33.7 |
| 山 | | 1.4 | 6.9 | 23.1 | 21.8 | 20.9 | 25.9 |
| 川 | | 1.4 | 7.1 | 26.7 | 23.3 | 16.4 | 25.1 |
| 湖や沼 | | 12.7 | 21.9 | 26.0 | 16.3 | 10.0 | 13.1 |

図3・家族でのレジャー体験(全体)



自然体験の内容

これまで見てきたように、全体としては決して多いと言えそうもない自然との接触の回数であるが、ではそうした機会の中での体験の内容はどのようなものだろう。

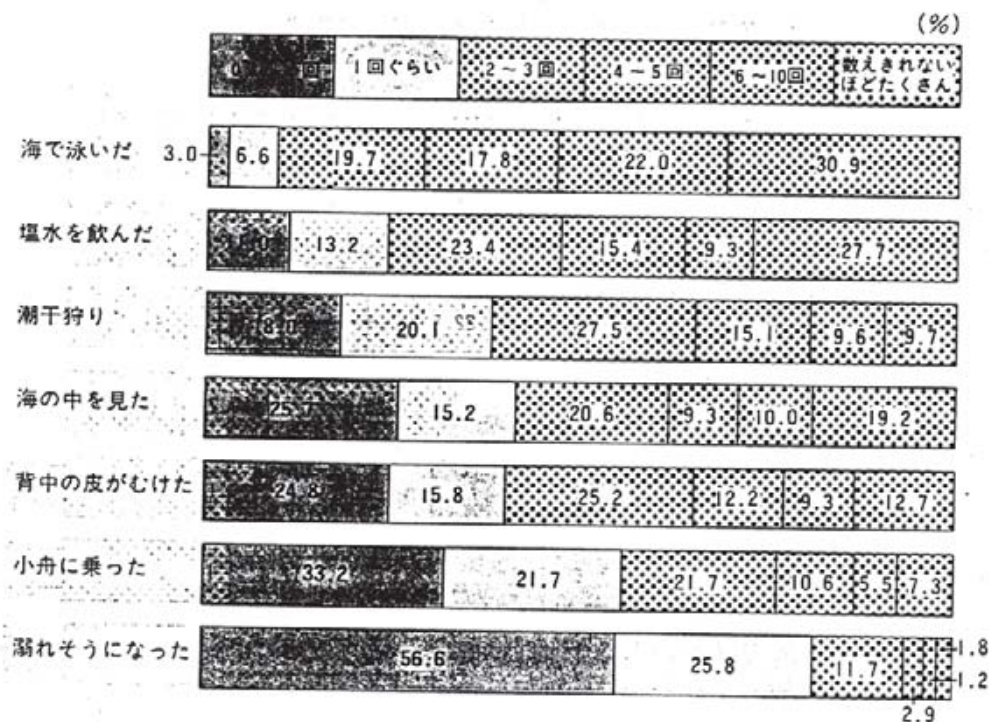
まずいちばんよく行く海での体験である(図4)。頻度の多い順に並べてあるが、上位の方に並ぶのは「海で泳ぐ」「塩水を飲んで鼻がツーンとした」などで、8割前後の子どもが、海に入った経験を持っている。しかし「水中メガネを使用して海の中を見る」は、4人に1人は全くないと答えており、「背中の皮がむけてビリビリした」体験も、4割が全く持っていないか、1度ぐらいしか体験していない。つまり海へ行ったといっても、本格的に海とかかわったのではなさそうである。さらに「海で溺れそうになった」り、「小舟に乗った」りしたこ

とは、極めて少ないらしいことも、それを物語っている。また「潮干狩り」の経験が思ったより少ないのも意外である。1度もない子どもが18%、たった1回が20%、2～3回が28%もいる。

しかしこうした海での体験の内容は、海に近い場所に住むかどうかによっても、大きく左右されそうである。そこで表6は、A校(東金市にある)の結果をぬき出して見たものである。すでに述べたように、かつて半農半漁の町だったこの地域は、海まで自転車で40分。子どもの足には遠いが、家族で海へ行くには、かなり恵まれた条件下にあると言えるだろう。

表が示すように確かに海とのかかわりは、図4で見たサンプル全体の数字に比べて増している様子が見てとれるが、しかしまたこの地

図4・海に行つて経験したこと(全体)



域の子どもですら、「生まれてから海で泳いだことの4～5回以下」の子どもが、約30%もいるし、「背中が皮がむけるほど、海で遊んだ経験の全くない」子どもも、10%はいることがわかる。また「潮干狩りを2～3回以下しかしたことがない」子どもも40%はいる。「溺れかけた体験」は、半分の子どもが持っていない。このくらい地理的に恵まれた地域でも、海とのかかわりは、今やそれほど十分とは言えないようである。

ないようである。

次は川での体験の内容を見よう(図5)。ここでも海と同様に、「溺れそうになった」り「小舟に乗った」りのような川との密接な体験は少なく、「水切り」や「魚捕り」など比較的浅いかかわりが一般的である。

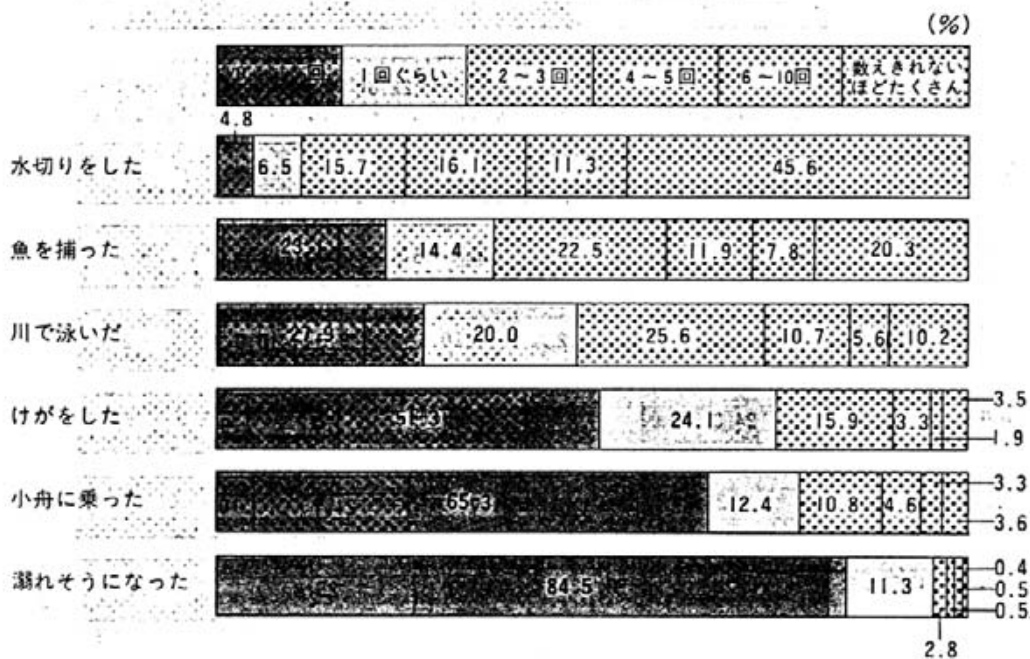
さらに、海の場合にならって、川まで子どもの足で歩いて行ける地域にあるB校のデータをぬき出して見たのが表7である。全体の

表6・海での体験(A校)

(%)

| 項目 | 尺度 | 0回 | 1回ぐらい | 2～3回 | 4～5回 | 5～6回 | 数えきれないほどたくさん |
|----------|----|------|-------|------|------|------|--------------|
| 海で泳いだ | | 4.1 | 5.0 | 10.1 | 11.5 | 13.6 | 55.7 |
| 塩水を飲んだ | | 9.3 | 11.9 | 23.3 | 12.5 | 12.8 | 30.2 |
| 海の中を見た | | 39.0 | 15.8 | 17.0 | 9.1 | 5.2 | 13.9 |
| 背中が皮がむけた | | 10.7 | 9.5 | 22.8 | 17.5 | 13.3 | 26.2 |
| 潮干狩り | | 7.1 | 10.4 | 22.2 | 18.6 | 10.9 | 30.8 |
| 小舟に乗った | | 36.4 | 21.6 | 22.5 | 8.4 | 5.1 | 6.0 |
| 溺れそうになった | | 50.2 | 31.0 | 11.3 | 5.7 | 1.2 | 0.6 |

図5・川に行って経験したこと(全体)



データに比べて度数は増えているものの、やはりここでも、川という自然を今ひとつ十分に利用して遊んでいない子どもたちの姿が、浮かびあがってくる。

最後は山とのふれ合いの内容である(図6)。ここでも子どもにとってはロープウェイやケーブルカーの使用頻度は高いが、その他の本当に山らしい体験はあまり何度もしていないことがわかる。また前掲のB校は、山にも近

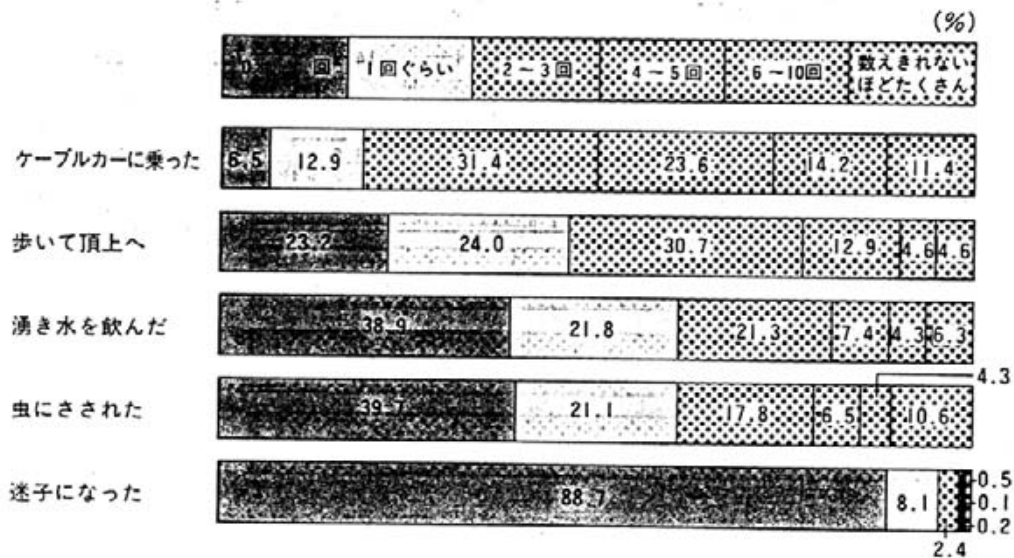
い場所なので、再びそのデータをひろって見た(表8)。川以上に山は子どもに利用しにくい、かかわりの浅い自然であることが見てとれる。

考えて見ると、子どもの身近に、野原や空地や小川など、自力で利用できる小さい自然がなくなった今日、山や川、海などの大きな自然には、おとなの配慮で十分なかかわりの機会が与えられなければならないだろう。また、

表7・川での体験(B校)

| 項目 | 尺 度 | | | | | |
|----------|------|-----------|------|------|-------|------------------|
| | 0回 | 1回 ぐらい | 2-3回 | 4-5回 | 6-10回 | 数えきれない ほどたくさん |
| 水切りをした | 1.7 | 0.8 | 7.6 | 16.1 | 12.7 | 61.1 |
| 川で泳いだ | 13.6 | 17.8 | 27.1 | 14.4 | 8.5 | 18.6 |
| 魚を捕った | 10.3 | 12.8 | 23.1 | 12.0 | 11.1 | 30.7 |
| 小舟に乗った | 61.6 | 12.8 | 12.8 | 5.1 | 3.4 | 4.3 |
| けがをした | 48.7 | 18.8 | 20.5 | 7.7 | 2.6 | 1.7 |
| 溺れそうになった | 72.8 | 24.1 | 0.9 | 0.0 | 0.9 | 1.3 |

図6・山に行って経験したこと(全体)



A・B・C校のように地理的条件にはかなり恵まれていると言ってよい地域ですら、子どもたちがそれらの自然とさほど接触をしていない様子が見てとれるのは、なんとも残念なことである。

また図7は、その他の自然体験を見たものである。図は1度もない頻度の高い順に並べてある。まず体験頻度の少ないのはスキー、テントでの宿泊、飯ごう炊さん、キャンプファイヤーなど、いわゆる野外活動で得られる体験であり、半数かそれ以上の子どもが、1度もしていないか、1度ぐらいしかしたことがないと答えている。

その他の体験でも、芋掘り、栗ひろいのように、場を得なければできないものは別として、タコをあげたことが、ほとんどない(1回以下)子どもが31%、虹をほとんど見たことがない子どもが16%、雪をほとんど食べ

たことのない子どもが20%、雪ダルマをほとんど作ったことがない子どもが12%などの数字は、われわれ昔の人間には信じ難い思いもする数字である。また付近に場がなければ仕方がないとは言え、野原を走り回ったことがほとんどない子どもが21%、2～3回しかない子どもが18%、4～5回しかない者が同じく18%などの数字は、子どもたちが今日、いかに自然と遠く離れた生活をしているかを暗示する例だろう。なんともかわいそうな子どもたちの生活である。

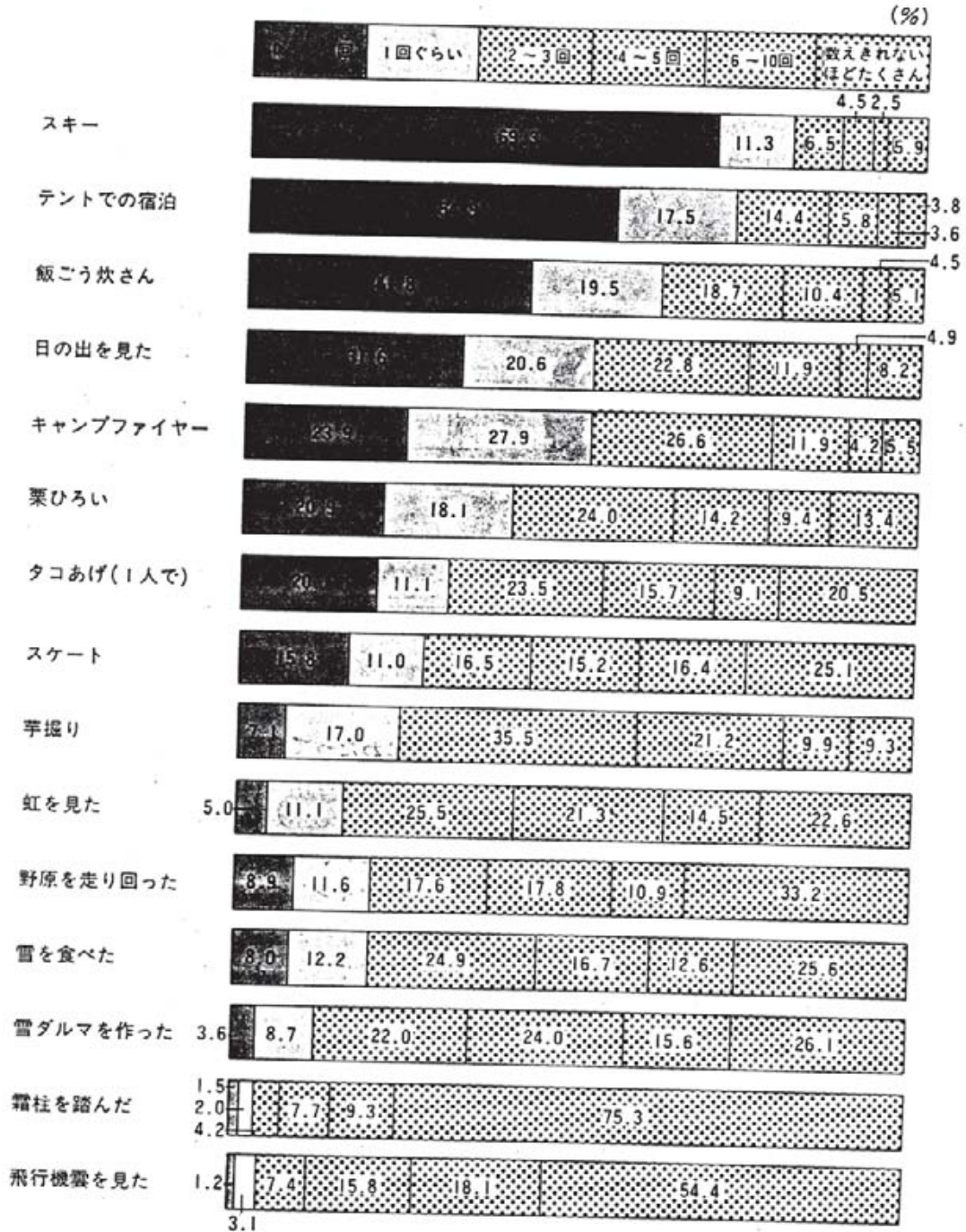
くり返しになるが、日いちにちと自然の失われていくわれわれの日常の中で、どうやったら子どもたちに、小さな自然や大きな自然とのかかわりを保障してやることができるか。それが今後おとなに課せられた大きな課題であろう。

表8・山での体験(B校)

(%)

| 項目 | 0回 | 1回 ぐらい | 2～3回 | 4～5回 | 6～10回 | 数えきれない ほどたくさん |
|------------|------|-----------|------|------|-------|------------------|
| ケーブルカーに乗った | 6.0 | 12.0 | 33.3 | 26.5 | 17.9 | 4.3 |
| 歩いて頂上へ | 12.3 | 29.8 | 35.1 | 14.9 | 7.0 | 0.9 |
| 湧き水を飲んだ | 39.1 | 18.3 | 20.9 | 13.0 | 6.1 | 2.6 |
| 虫にさされた | 44.3 | 19.1 | 20.0 | 3.5 | 3.5 | 9.6 |
| 迷子になった | 88.6 | 7.9 | 3.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |

図7・自然とのふれ合いの経験(全体)



2. 田舎を求めて



都市に住む子どもたちが、比較的長期にわたって自然に親しむ機会を持てるとしたら、それは夏休み、しかも地方に住む祖父母や親せきを訪ねての旅行ではないだろうか。しかし親せき中が都会暮らしのため夏休みになっても田舎への旅行ができない、という話もよく耳にすることである。業者が企画するサマーキャンプや、〇〇ツアーなどに参加させるより、田舎があり、親せきがいて、そこで夏休みを過ごして帰って来る、などということができたら、素晴らしい理想だろう。では一体子どもたちは、どのくらいこうした田舎の親せきを持っているのだろうか。

両親の育った場所

ここでとりあげた4つの学校の子どもたちは、新宿のD校はむろんのこと、他の3校も一応町と呼べる所に住んでいる。その両親の故郷を尋ねたのが図8である。工場地帯を除

いて、あらゆる場所から人が集まって来て、町に住んでいる様子がわかる。しかしもう少し厳密に「大都市」の住民に限って、その生まれ育った場所を見てもみることにしよう。表9は、

新宿のD校の場合である。

表が示すように、土地っ子はわずかであるが、他の都会から移り住んだ者を加えると、2割ぐらいが大都市育ちである。中小都市(お店などがわりとある場所)の出身者が2割強。田舎と呼べるような地域(農山村、漁村)から

の者が4割前後という結果が得られている。思ったほどには、田舎と呼べる地域の出身者は多くない。これでは、夏休みに田舎へ行ける子どもの数も限られてしまいそうである。では次に、具体的にそうした可能性を求めて田舎の親せきの有無を見て行くことにしよう。

図8・両親の育った場所

| | 今いる町 | 都会 | 中小都市 | 工場地帯 | 農 村 | 山 奥 | 海 辺 | その他 |
|-----|------|------|------|------|------|------|-----|------|
| 父 親 | 13.3 | 8.5 | 19.1 | 0.7 | 20.7 | 10.3 | 6.5 | 20.9 |
| 母 親 | 6.1 | 11.1 | 24.4 | 0.9 | 27.2 | 8.4 | 6.6 | 15.3 |

表9・両親の育った場所(D校)

| 育った場所 | 両 親 | |
|-------|------|------|
| | 父 親 | 母 親 |
| 今いる町 | 14.6 | 5.3 |
| 都会 | 8.4 | 12.2 |
| 中小都市 | 21.9 | 25.3 |
| 工場地帯 | 1.1 | 1.0 |
| 農 村 | 20.0 | 29.8 |
| 山 奥 | 9.1 | 5.7 |
| 海 辺 | 6.3 | 7.4 |
| その他 | 18.6 | 13.3 |
| | 23.0 | 17.5 |
| | 35.4 | 42.9 |

祖父母の住んでいる所

まず図9は祖父母の有無である。祖父母の両方にせよ一方にせよ、祖父母のいる子どもは父方で83%、母方で86%と、さすが高齢化社会と言われるだけのことはある。そして図10に示すように、「田舎に住む」祖父母は5割弱、遠くの「都会に住む」者は父方で15%、母方で20%となっている。

そうした祖父母のうち、田舎に住んでいる場合だけに限って、これまで遊びに行ったことがあるかどうかを尋ねたのが、図11と図12

である。父方の86%、母方の92%の数字が示すように、少なくとも1度以上行ったことのある子どもがほとんどである。そして図11、図12の下部が示すように、夏休みにはいつも田舎の祖父母の家を訪問する子どもが、父方で46%、母方で55%にも達する。お正月休みの場合はやや割合は低いものの、父方で36%、母方で41%。田舎に祖父母のいる子どもは、こうした長期の休みが自然体験を与えられる貴重な時となっていることが推測される。

図9・祖父母の有無

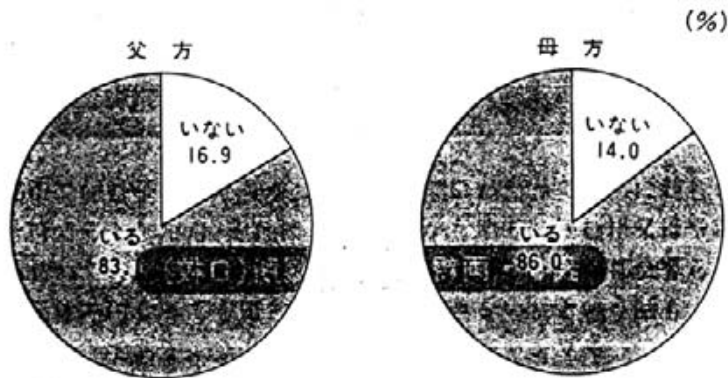


図10・祖父母はどこに住んでいるか

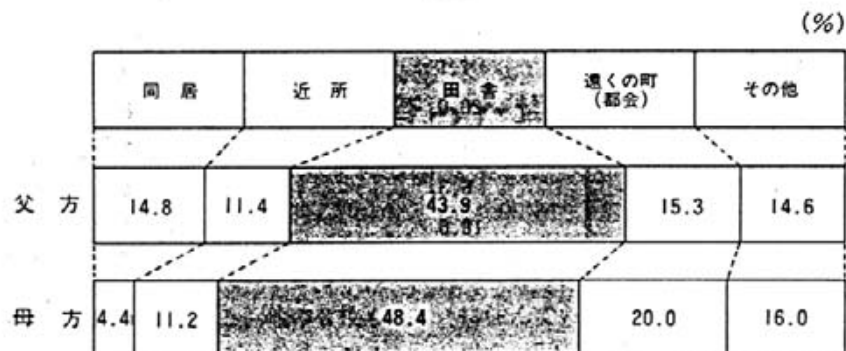


図11・祖父母(父方)の家に遊びに行ったことがあるか

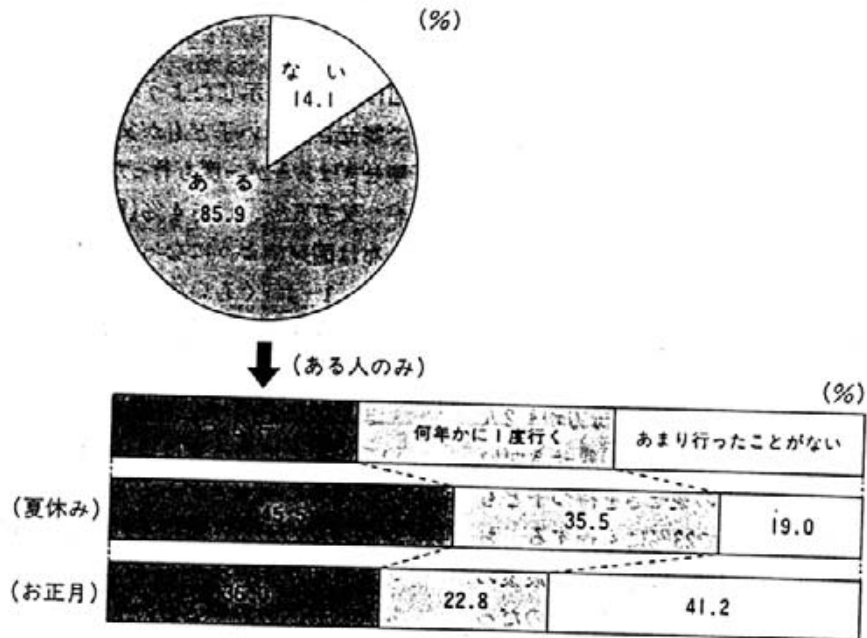
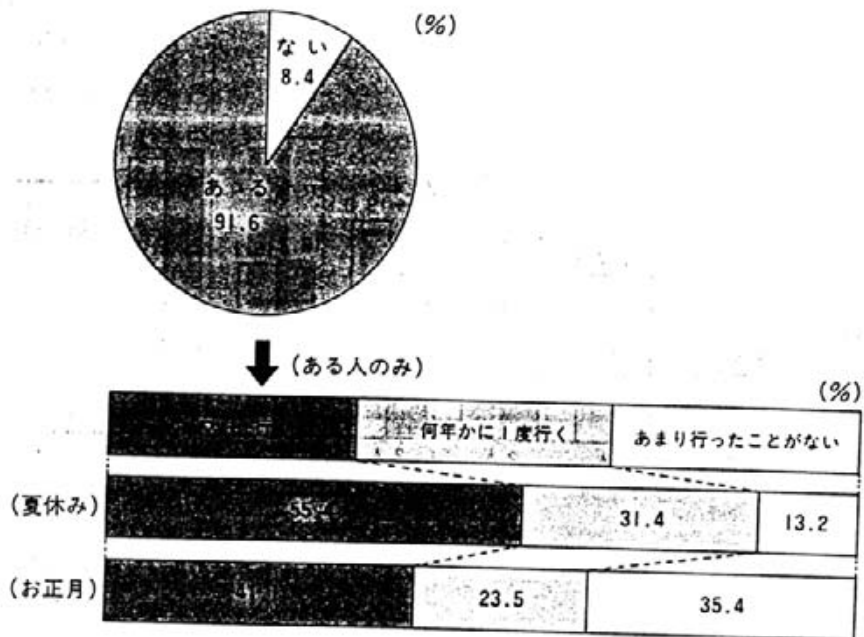


図12・祖父母(母方)の家に遊びに行ったことがあるか



田舎の親せき

さて子どもたちが訪問できるのは、祖父母の家ばかりではない。父親母親のきょうだいの家も貴重である。たくさんのきょうだいの中には、田舎に住む者も都会に住む者もあるだろう。しかしこうした親せきづき合いは、どのくらいひんぱんに行われているのだろう。

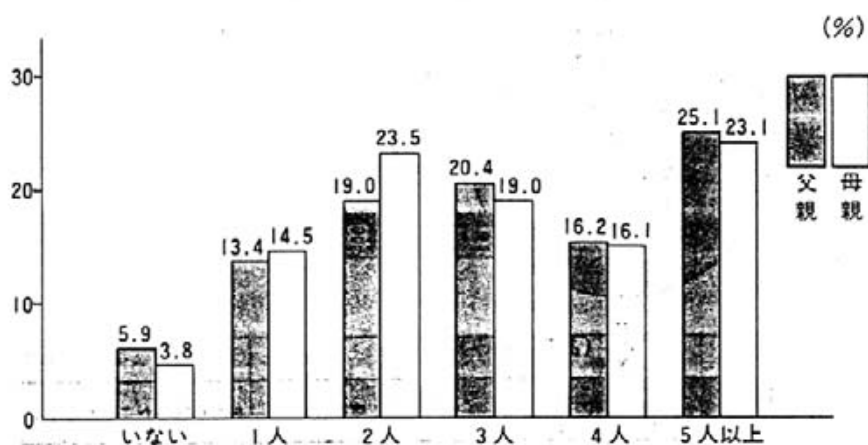
まず図13は両親のきょうだい数(両親以外の)である。少子型の現代家族と違って、父方の平均きょうだい数が3.3人、母方が3.2人、合わせて、6.5軒(祖父母以外の)親せきがいる計算になる。5軒以上の親せきを持つ子どもも、父方で25%、母方で23%にも達する。おそらく数の上からは、親せきに恵まれた最後の世代の子どもたち、ということになるのだろう。

さてその親せきとのつき合いぶりはどうか。

図13の左端に示したように、父母が1人っ子で親せきのない子どもが父方6%、母方4%。親せきはあるが一度も行ったことのない子どもが、父方6%、母方4%(図14)、残り90%の分布は図14のようになって、さほど多くはないが、1~4軒ぐらゐの家へ行った経験を持っている子どもが父方78%、母方76%となっている。

また図15に示したように、両親のきょうだいで、田舎にある家は全体の66%(父方)。しかし田舎に親せきがあると言っても、1~2軒が40%(父方)と、数はそれほどではないものの、とにかく、多少の場は持っている。さきに見た祖父母の家と合わせれば、たいていの子どもが、何軒かの田舎の親せきを持っていると言えそうである。

図13・両親のきょうだい数*



注) 平均 { 父方 3.3人
母方 3.2人

* 生存者のみ・父母を含まず

図14・両親のきょうだいの中で今まで行ったことのある家の数

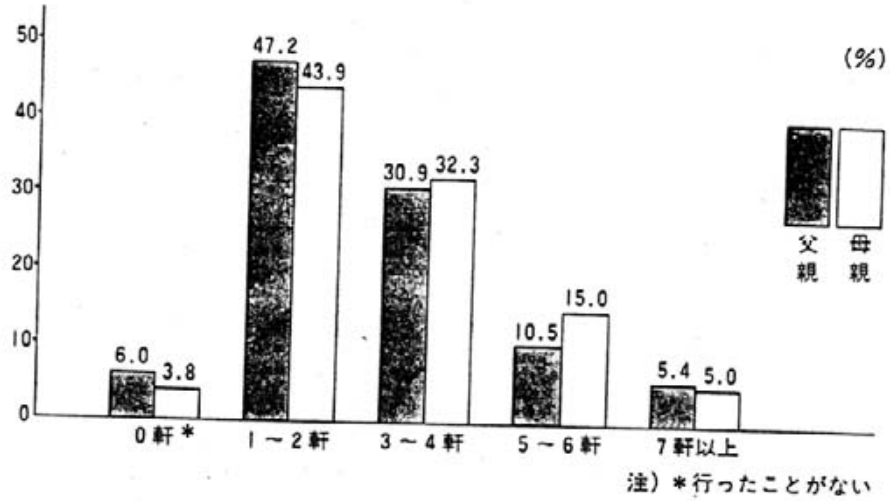
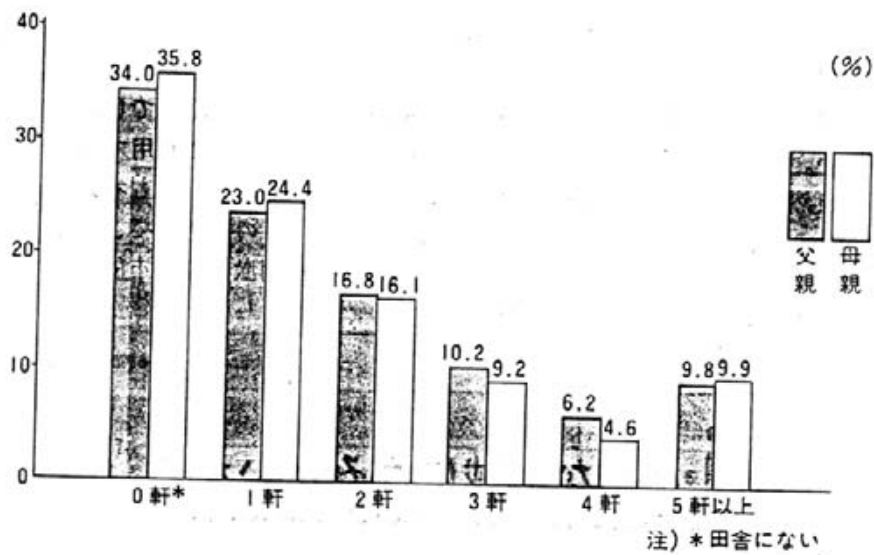


図15・両親のきょうだいで田舎にある家の数



3. 子どもが求める生活環境



さて、すでに見てきたような自然体験の不足した状況の下で、子どもたちは何を求めて暮らしているのだろうか。自然とのふれ合いの不足を埋めるべく、夏休みや冬休みに、自然を求めて田舎の親せきの家へ行くとしても、それは365日のほんの何十分の一の時間でしかない。やはり毎日の子どもの生活圏の中に子どもが独力で利用できる自然がなければならぬだろう。しかし他方、次のようにも考えられる。自然への憧憬は、人生に疲れたおとなのものであって、子どもたちはけっこう都市的な環境に適応し、より刺激的な都市的な生活を求めているのかもしれない。

どんな地域に住みたいか

まず図16は、子どもたちに一番住みたい地域を尋ねたものである。ここでは特に掲げなかったが、ほとんど地域差はない。山奥が嫌われているだけで、あとは海辺も農村も都会もほぼ等しい割合で好まれている。つまり全

体の7割は都会より自然の多い田舎に住みたいと答えている。都市へのあこがれが強いことも予想したのだが、やはり子どもには、自然が何より愛されていることがわかる結果である。

さて図17は、自分の住んでいる地域についてのサンプル全体の評価だが、自分の町を自然や子どもの遊び場のある緑の多い地域としている子どもは、14%しかいない。図18でも明らかのように、子どもが自分の足で、または自転車で行ける範囲内にあるのは、デパート、公園、グラウンドなど、人間が作った施設で

あって、自然ではない。4校のうちA・B・Cの3つの学校ですら、昔は緑多い自然のまっただ中だったはずなのに、今はもう都市化してしまっており、よほど子どもたちの間にエネルギーがなければ、自然は子どもたちの行動半径の中には入っていないと言えるだろう。

図16・子どもの住みたい場所

| | 海辺 | 田畑のある所 | 都会 | 山奥 | (%) |
|----|------|--------|------|----|------|
| 全体 | 38.6 | 28.7 | 28.5 | | -4.2 |
| 男子 | 31.0 | 34.4 | 29.1 | | 5.5 |
| 女子 | 47.8 | 21.9 | 27.8 | | -2.5 |

図17・自分の町

| 家や車が多い | 中間 | 緑が多い | よくわからない | (%) |
|--------|------|------|---------|-----|
| 34.6 | 41.3 | 13.6 | 10.5 | |

図18・子どもの生活圏にあるもの

| | 歩いて行ける | 自転車で行ける | バス・電車 | おとなに連れて行ってもらわないと行けない | (%) |
|-------|--------|---------|-------|----------------------|--------------|
| 海 | 21.1 | 75.6 | | | |
| 山 | 6.3 | 42.8 | 38.6 | | |
| 川 | 30.7 | 28.3 | 22.6 | 18.4 | |
| 湖や沼 | 9.3 | 33.4 | 54.6 | | |
| 公園 | 91.9 | 7.2 | | | -0.7 -0.2 |
| グラウンド | 43.0 | 47.5 | 6.4 | | -3.1 |
| デパート | 33.5 | 56.2 | 9.0 | | -1.3 |
| 遊園地 | 12.2 | 60.6 | 24.6 | | 2.6 |

自分の町にほしい環境

子どもたちの生活の中でほしがられているのは、どんな環境なのだろうか。自分の町にはどんな自然や建物があればいいと子どもたちは願っているのだろうか。図19はそうした自然や建物、店などを挙げて、「ぜひほしい」から、「ぜんぜんいらない」までの評価をさせたものである。

まず第1位は「仲よしの友だちの家」。次いで「野原」「林や小さい丘」「小さい池や川」など子どもの遊べる小さい自然が並び、さらに「駄菓子屋」「レストラン」「本屋」「文房具屋」「子ども用映画館」「ゲームセンター」「お菓子屋」と、子どもの利用できる店々が続く。スポーツ用施設としては、「スケート場」「テニスやサッカーのコート」が上位に位置する。いわば、小さな子どもの生活圏がマイタウンのイメージとして子どもの胸の中にあることがわかる。そしてその中心はおそらく「仲よしの友だちの家」が象徴するような、親しい人間関係なのではなかろうか。

次には逆に、子どもから不必要と思われるものをひろって見よう。28位に「校長先生の家」、26位に「受け持ちの先生の家」があるのは、どういうわけだろう。先生という対象は、学校にいる時だけ敬愛されるものの、自分たちのプライベートな生活の中にまで入ってこられるのは、うっとうしいとの思い

があるのかもしれない。残念なことである。同様に親せきの家も20位と決して上位にあるとは言い難い。

またスポーツ施設としては、プールやスイミングクラブが下位にあるのはなぜだろう。また同じ自然の中でも、「田んぼや畑」などはおとなの郷愁の中にあって求められているだけで、子どもにとっては参加、利用できない自然でしかないのだろう。また「小さい空地」が下位にあるのは、放課後の外遊びを知らず、友だちもいないので、昔のように空地をかつこうな遊び場とした体験を欠くため、空地の意味がつかめないでいるためかもしれない。また同様のことが「グラウンド」や「児童公園」にもあてはまりそうである。これらの環境整備は、近年行政の手で着々と進められ、事実すでに表2で見たように、公園やグラウンドは、子どもたちの90%が自転車に乗れば行けるほどに、彼らの生活圏内に位置している。しかしそうした公園やグラウンドを、作っては見たものの、一部の子どもたちが使うのみで、一向にフルには使われていない、という声を聞く。図19で、野原や林や丘や池や川と比べて、かなりランキングが低くなっているのは、現代の子どもたちが、広い空間を遊びに使いこなすだけの経験と行動力を持っていないことを示すものだろう。

図19・自分の町にほしい場所や店—①

| | | (%) | | | |
|----------------------|----|-------|---------|--------|----------|
| | | ぜひほしい | できればほしい | なくてもよい | ぜんぜんいらない |
| ① 仲よしの 友だちの家 | 全体 | 72.1 | 22.3 | 4.1 | -1.5 |
| | 男子 | 67.9 | 23.9 | 5.8 | -2.4 |
| | 女子 | 77.0 | 20.4 | | -0.5 |
| | | 2.1 | | | |
| ② 野 原 | 全体 | 64.9 | 25.5 | 6.9 | -2.7 |
| | 男子 | 63.8 | 24.2 | 8.1 | -3.9 |
| | 女子 | 66.3 | 27.1 | 5.5 | -1.1 |
| ③ 林や小さい丘 | 全体 | 64.8 | 22.7 | 9.2 | -3.3 |
| | 男子 | 62.3 | 22.3 | 10.9 | 4.5 |
| | 女子 | 67.7 | 23.3 | 7.2 | -1.8 |
| ④ 駄菓子屋 | 全体 | 63.3 | 22.6 | 8.8 | 5.3 |
| | 男子 | 57.9 | 23.5 | 10.6 | 8.0 |
| | 女子 | 69.8 | 21.6 | 6.6 | -2.0 |
| ⑤ スケート場 | 全体 | 58.7 | 24.5 | 10.2 | 6.6 |
| | 男子 | 56.1 | 22.6 | 11.4 | 9.9 |
| | 女子 | 62.1 | 26.8 | 8.6 | -2.5 |
| ⑥ レストラン | 全体 | 57.7 | 22.2 | 15.1 | 5.0 |
| | 男子 | 59.6 | 21.0 | 14.2 | 5.2 |
| | 女子 | 55.7 | 23.6 | 16.0 | 4.7 |
| ⑦ 小さい池や川 | 全体 | 57.9 | 25.6 | 12.6 | -3.9 |
| | 男子 | 64.8 | 20.2 | 10.3 | 4.7 |
| | 女子 | 49.4 | 32.1 | 15.5 | -3.0 |
| ⑧ テニス、サッカー などのコート | 全体 | 55.3 | 26.3 | 12.3 | 6.1 |
| | 男子 | 59.4 | 23.4 | 9.9 | 7.3 |
| | 女子 | 50.5 | 29.8 | 15.2 | -4.5 |
| ⑨ 本 屋 | 全体 | 53.4 | 31.1 | 12.0 | -3.5 |
| | 男子 | 52.2 | 29.8 | 12.5 | 5.5 |
| | 女子 | 55.0 | 32.5 | 11.4 | -1.1 |
| ⑩ 文房具屋 | 全体 | 53.1 | 34.4 | 9.5 | -3.0 |
| | 男子 | 47.0 | 37.7 | 10.2 | 5.1 |
| | 女子 | 60.4 | 30.5 | 8.6 | -0.5 |

図19・自分の町にほしい場所や店②

| | | (%) | | | |
|-------------------|----|-------|---------|--------|----------|
| | | ぜひほしい | できればほしい | なくてもよい | ぜんぜんいらない |
| ⑪ 子ども用映画館 | 全体 | 52.9 | 20.6 | 18.8 | 7.7 |
| | 男子 | 56.5 | 17.8 | 15.9 | 9.8 |
| | 女子 | 48.5 | 23.9 | 22.3 | 5.3 |
| ⑫ ゲームセンター | 全体 | 52.0 | 30.2 | 13.6 | -4.2 |
| | 男子 | 57.5 | 25.8 | 12.0 | -4.7 |
| | 女子 | 45.4 | 35.5 | 15.5 | -3.6 |
| ⑬ お菓子屋 | 全体 | 46.9 | 26.4 | 21.8 | 4.9 |
| | 男子 | 48.9 | 25.0 | 19.1 | 7.0 |
| | 女子 | 44.6 | 28.0 | 25.1 | -2.3 |
| ⑭ デパート | 全体 | 45.2 | 30.9 | 18.6 | 5.3 |
| | 男子 | 48.5 | 27.1 | 17.5 | 6.9 |
| | 女子 | 41.3 | 35.3 | 20.0 | -3.4 |
| ⑮ ハンバーガーの店 | 全体 | 45.1 | 23.5 | 23.8 | 7.6 |
| | 男子 | 46.4 | 22.7 | 21.0 | 9.9 |
| | 女子 | 43.6 | 24.4 | 27.2 | -4.8 |
| ⑯ 野球のできる グラウンド | 全体 | 44.1 | 23.5 | 22.1 | 10.3 |
| | 男子 | 61.1 | 21.6 | 11.3 | 6.0 |
| | 女子 | 23.4 | 26.0 | 35.2 | 15.4 |
| ⑰ 児童公園 | 全体 | 42.5 | 31.8 | 19.0 | 6.7 |
| | 男子 | 42.2 | 30.5 | 18.1 | 9.2 |
| | 女子 | 42.9 | 33.4 | 20.0 | -3.7 |
| ⑱ ベットショップ | 全体 | 40.3 | 22.1 | 25.1 | 12.5 |
| | 男子 | 35.5 | 20.0 | 26.4 | 18.1 |
| | 女子 | 46.2 | 24.7 | 23.4 | 5.7 |
| ⑲ 子ども図書館 | 全体 | 38.1 | 31.4 | 21.1 | 9.4 |
| | 男子 | 37.0 | 29.1 | 20.7 | 13.2 |
| | 女子 | 39.5 | 34.1 | 21.6 | 4.8 |

図19・自分の町にほしい場所や店③

| | | (%) | | | |
|--------------------|----|-------|---------|--------|----------|
| | | ぜひほしい | できればほしい | なくてもよい | ぜんぜんいらない |
| ⑳ 親せきの家 | 全体 | 37.0 | 31.6 | 22.4 | 9.0 |
| | 男子 | 38.4 | 30.4 | 21.0 | 10.2 |
| | 女子 | 35.3 | 33.0 | 24.1 | 7.6 |
| ㉑ 小さい空地 | 全体 | 33.6 | 25.3 | 30.6 | 10.5 |
| | 男子 | 35.1 | 25.9 | 27.0 | 12.0 |
| | 女子 | 31.7 | 24.6 | 35.0 | 8.7 |
| ㉒ レコード屋 | 全体 | 32.0 | 22.8 | 29.8 | 15.4 |
| | 男子 | 31.3 | 18.9 | 29.2 | 20.6 |
| | 女子 | 32.9 | 27.5 | 30.4 | 9.2 |
| ㉓ 田んぼや畑 | 全体 | 29.9 | 25.8 | 29.5 | 14.8 |
| | 男子 | 35.5 | 23.3 | 24.6 | 16.6 |
| | 女子 | 23.7 | 28.8 | 35.5 | 12.6 |
| ㉔ 大きな スーパーマーケット | 全体 | 27.5 | 33.2 | 28.3 | 11.0 |
| | 男子 | 27.4 | 31.4 | 26.2 | 15.0 |
| | 女子 | 27.6 | 35.4 | 30.8 | 6.2 |
| ㉕ スイミング (水泳)クラブ | 全体 | 23.6 | 21.8 | 37.0 | 17.6 |
| | 男子 | 22.1 | 18.6 | 35.3 | 24.0 |
| | 女子 | 25.3 | 25.7 | 39.2 | 9.8 |
| ㉖ 受け持ちの 先生の家 | 全体 | 14.9 | 21.1 | 30.7 | 33.3 |
| | 男子 | 16.0 | 18.0 | 26.5 | 39.5 |
| | 女子 | 13.7 | 24.9 | 35.8 | 25.6 |
| ㉗ プール | 全体 | 13.9 | 9.2 | 32.9 | 44.0 |
| | 男子 | 20.3 | 11.0 | 30.8 | 37.9 |
| | 女子 | 6.7 | 7.0 | 35.5 | 51.4 |
| ㉘ 校長先生の家 | 全体 | 4.3 | 14.6 | 39.6 | 41.5 |
| | 男子 | 5.5 | 13.2 | 33.3 | 48.0 |
| | 女子 | 3.0 | 16.4 | 47.3 | 33.3 |